

日本における外国人タトゥーの入浴施設での対処法に関わる考察

～グローバル社会におけるタトゥー文化の認識～

1631035 木村 萌（新井ゼミ）

入浴施設で起きたタトゥーのニュース報道を調べ、日本と外国のタトゥーの歴史と文化や、入浴施設で適用される「温泉法」や「公衆浴場法」を検証したうえで、2019年のラグビーワールドカップ（W杯）日本大会開催時における入浴施設での対応や、試合会場となった大分県別府市や東京都調布市の入浴施設を中心に取材を行い、入浴施設でのタトゥーに対する対応を考察した。

日本の入浴施設ではタトゥーを施している人の入浴をお断りしている場所が多くある。2019年に日本で開催されたラグビーW杯実施期間中には、「日本滞在時における外国人選手のタトゥーを隠すよう」と、主催者側から指示が出された。その一方で、開催地となった大分県別府市では、タトゥーが施してあっても入浴が可能な施設をまとめたサイトやマップを作成した。マップは外国人にとって重要な情報提供であり、たいへん好評であった。同じく開催地である東京都調布市の入浴施設を調査すると、施設ルールに則り、隠す雰囲気のあるタトゥーは「入浴を可能にした」施設や、保健所の指導のもとで「タトゥーは一切お断り」にした施設など様々であった。調布市のような入浴施設でのタトゥーに対する対応が様々な場所で、別府市が行ったような温泉マップを作成・活用すれば、日本を訪れる外国人に対して「タトゥーがあっても温泉や大浴場での入浴を可能」となる情報を提供でき、タトゥー問題を回避できることが明らかになった。

○要旨

北海道の入浴施設で、文化交流のために来日していたニュージーランドの先住民族マオリの女性が、顔に施されたタトゥーが民族伝統タトゥーにも拘らず、タトゥーを理由に入浴を拒否された報道に着目し、日本における外国人タトゥーの入浴施設での対処法を検証・考察した。ラグビーW杯で多くの外国人が日本を訪れ、入浴施設を利用した事例を取材し、現地調査を踏まえて、入浴施設でのタトゥーへの対応を検証し、外国人のタトゥー問題に対して最適な対処方法を導き出した。

○評価ポイント

タトゥーに関する数多くの文献を丹念に調査し、それを踏まえて現地調査と施設関係者へのインタビュー取材を地道に行い、考察している点で高く評価できる。文献調査と現地調査のバランスが良く、それを元にした検証・考察も丁寧であり、説得力のある論の展開を成す論文として評価できる。